藤林普山訳『解屍篇』について

―森田千庵署名（印）入り写本より―

長谷川　一　夫

演者は、先年来、藤林普山の門弟で越後における蘭学の祖と称される、蒲原郡加茂町（新潟県加茂市）の蘭方医森田千庵の関係資料採訪を続けてきた。このほど、彼の関係資料の中に、普山訳『解屍篇』及びその関連資料の存在が判明したので次に示す。

一　藤林泰介訳『解屍篇』（大尾『解屍譜』）　一冊
（武田科学振興財団杏雨書屋蔵）

二　『普山先生　解屍篇　全』　一冊

三　『普山先生訳稿　解屍篇原註　完』　一冊

四　『普山先生　解屍篇講録　全』　一冊
（以上、九州大学附属図書館医学分館蔵）

五　藤林泰介重刻『解屍篇』　一冊
（新潟県柏崎市立図書館森田文庫蔵）

六　『普山先生説　解屍篇奇聞』　五冊
（養徳文庫蔵（新潟県加茂市））

『解屍篇』は、『訳鍵』『和蘭語法解』『和蘭薬性弁』『泰西度量考』『西医方選』『西医今日方』等とともに、普山の著訳書の一つに挙げられている（山本四郎氏「藤林普山伝研究」『日本洋学史の研究』Ⅲ所収参照）。また、普山訳の解剖書としては、Steven Blankaart の『第三板の訳、武蘭加児都解剖書　完』が知られている（小川鼎三氏「明治前日本解剖学史」『明治前日本医学史』第一巻所収参照）。

そこで、普山の塾に学んだ千庵が所持していたと思われる『解屍篇』について述べる。

その冒頭には次のようにある。

檀止夫（タンシフ）〔名〕〔地〕王学校医寮内医兼自然学長　西洋　與般亜達母（ヨハンアダム）
鳩尓母斯（キユルムス）　選述　伶電〔名〕〔地〕外科偈羅尓鐸直屈点（ケイラルトチクテン）　翻訳
日本　平安　疾医　藤林紀元泰介　翻訳

また、普山が塾生に講義した記録と思われる『普山先生解屍篇講録』には、『解屍篇即解體新書也、此書ハ一千七百五十一年ノ発行ニシテ、原名ターフルアナトミアト云、ターフルハ譜也表也編也、アナトミア

ハ解体也、解体トハ人屍ヲ解コトナリ（以下略）」とある。さらに、千庵のその時の学習の記録と思われる『普山先生説　解屍篇奇聞』天の部には、「ヨアン・アタン・キュルムスセン、解屍書本名、和邦出板は千七百三十一年ニ成ル、タアフル。アナトミア即解尸（屍）書名。譜也表也編也、アシアリテ物ノ台ニスベキ物也、眼凡之類スベテ物ヲノセルモノヲ云也、解尸（屍）篇體之字不当故ニ尸ノ字ニ代ルガヨシ（以下略）」と記されている。

普山訳『解屍篇』は、紛れもなく J. A. Kulmus 著の『解剖学表』（いわゆるターヘル＝アナトミア）をライデンの外科医 G. Dicten がオランダ語に翻訳したものの重訳であり、杉田玄白等による『解体新書』（一七七四年刊）と同一の翻訳書である。その書名を『解屍篇』と表したのは、「體之字不当故ニ尸ノ字ニ代」えたとする事情も窺える。

普山の『解屍篇』出版については未詳である。『解屍篇』及び『解屍篇原註』の成立は、千庵の在塾当時（文政四―五年）かそれ以前と察せられる。そして、普山が両書に基づき塾生に講義していたことも『解屍篇講録』『解屍篇奇聞』により明らかなことと言えよう。さらに、千庵は Tabula Anatomia door J. A. Kurumus, MDCCXXXIII なる蘭文写本を所持している（新潟大学医学部図書館）。おそらく在塾当時、『解屍篇』等にかかわって筆写したものと推察される。とすると、普山は医学教授にターヘル＝アナトミアの蘭訳本を用いていたということになろう。

ところで、冒頭で紹介した『解屍篇』三冊は、杏雨書屋本を底本として、九州大学本、柏崎図書館本の順で転写されたものである。杏雨書屋本には M. Senman の署名が、九州大学本には千庵が常用している「山吉文庫」の印が二顆見える。柏崎図書館本は、千庵の実弟森田正治の傍系に当たる森田智恵氏が同館に寄贈された資料のうちの一冊で署名・印ともに見られない。杏雨書屋本については、既に藤浪剛一氏、中野操氏も注目されていたらしく、中野氏は同書に次のようなメモを残している。すなわち、「本書ハ藤浪剛一氏ハ藤林普山自筆本トサレルガ、末尾ニM.Sennanト署名ガアルノデ、普山ノ高弟デ越後ニオケル蘭学ノ祖、森田千庵ノ自筆稿本トスルノガ正シイト思ウ。但シ墨書ト朱批トハ書体ガチガウノデ、墨書ヲ千庵ノ門人ニ筆写セシメ千庵ガ朱批ヲ加エタモノトスベキカ、ドウカ？（一九五

七・七・三〇　中野操）というのである。このことについて直ちに判断することは、演者の力の及ぶところではない。

なお、『解屍篇』『解屍篇原註』『解屍篇講録』『解屍篇奇聞』は、現在筆稿途中であり、詳細についてはいずれ論文にして発表したいと考えている。

（新潟県小千谷市立片貝小学校）

『真斎謾筆』の小児門について

広田曄子

安藤昌益（一七〇三～一七六二年）は江戸時代中期の思想家で、八戸において医者として活躍した人物である。その稿本『自然真営道』（全百一巻・九十三冊）は自己の自然哲学を宇宙論的に体系づけた一大哲学思想大系をあらわしたものである。しかし、関東大震災によってその大半は焼失してしまい、現存するのは十五冊のみである。したがって昌益の医方を知ることが出来るのは『真斎謾筆』によってである。これは、昌益医学の病論と療法を中心に、『自然真営道』第七十三巻から第百巻に至る臨床医学各論の骨幹を抄出、筆写し、若干の注釈を加えたもので、宇都宮の町医であった真斎（一七八九～？）という人物が著したものである。